



©2016VFK

4月24日のFC東京戦で、試合前に氣勢をあげるヴァンフォーレサポーターら【写真提供 ヴァンフォーレ甲府】

特集

ヴァンフォーレ甲府のルーツは 鶴城クラブにあり

日に新た、また日に新た。甲府一高サッカー部にしかできない、「美しいサッカー」を積み重ねていこう。それがクラーク師の教えを引き継ぐ大先輩から託された、現役サッカー部への襷（たすき）だった。ヴァンフォーレ甲府のルーツをたどれば、甲府中学・甲府一高サッカー部OB会「鶴城クラブ」に行きつくことは多くの同窓生が知るところだ。しかし昭和29年の北海道国体におけるサッカー部の快進撃となると、これまで意外にスポットが当たっておらず、知る人も少ない。しかもこの裏には、戦後最大級の大惨事となった洞爺丸事故との間に、運命を感じさせるストーリーも存在していた。

【取材／構成】 ジャーナリスト・小川 朗(昭和53年卒)

洞爺丸事故を一回戦突破で回避

昭和29年（1954年）は鶴城クラブの後輩たち、甲府一高イレブンが最も輝いた年だった。時間軸でとらえると、昭和20年の終戦からわずか9年後であり、前回の東京五輪から10年前ということになる。

この年の秋季国民体育大会は、北の大地が舞台だった。当時の交通事情は、羽田―千歳が空路1時間半、青函トンネルを使用しての北海道新幹線の開通で東京―札幌間の時速260キロ運転、4時間43分の声も出る現在とは、遥かに隔たりがある。

一高イレブンはまず東京に中央本線で出て、上野から東北本線で青森まで。津軽海峡を青函連絡船で渡り、函館から札幌にたどりつく。実に34時間の長旅であった。チームの特徴は全員攻撃・全員守備。一高サッカーが県大会を鮮やかに勝ち上がり、北海道での国体にコマを進めた。全員が攻め上がり、全員で守る。言葉で言うのは簡単だが、それはフルタイム走りっぱなしのサッカーとイコールだ。当然、敵を上回るスピードと体力が必要であった。それ

に技術とチームワークが加わり、甲府一高サッカー部のレベルは飛躍的に上がった。

そのプレースタイルは、全国の強豪たちにも脅威だった。あれよあれよと勝ち上がり、決勝の刈谷高にこそ敗れたものの、堂々の準優勝を飾った。

この裏で、命運を分けたドラマがあった。実は甲府一高イレブンが、もしも一回戦で負けていたら――9月26日の青函連絡船への乗船が決まっていたという。

国民体育大会の秋季大会は、台風シーズンの真ただ中に行われるのがご存知の通り。

昭和29年9月26日。その日、津軽海峡はまさしく、大荒れの天候であった。未明に九州へと上陸した台風15号は110キロの速度で日本列島を北上。17時前後に津軽海峡を通過するとみられていた。

風が収まったため天候が回復するとした船長の判断もあり、18時38分出港。しかしこの後急速に天候は悪化した。南西からの平均40ノット、最大瞬間風速50

ノットという暴風と猛烈な波浪のため、函館港防波堤灯台近く、海岸まで数百メートルのところに停泊。寝台車と貨物車を積んでいて重心が高くなっていたことも災いし、4時間後に転覆し、乗客乗員1337名のうち1155名の死者・

行方不明者を出す大惨事となった。もしも一回戦敗退なら、一高イレブンの洞爺丸に乗る筈だった。ある意味、彼らは実力で自らのピンチを遠ざけたと言えるかもしれない。



5月4日の柏レイソル戦、前半12分ごろ、ヴァンフォーレサイドでの攻防シーン【写真提供 ヴァンフォーレ甲府】

ヴァンフォーレ甲府

誕生への軌跡

【草創期】

1913～1959年

ヴァンフォーレ甲府の前身である甲

府サッカークラブ誕生の機運は、この洞爺丸事故の半年前に盛り上がっていた。昭和29（1954）年5月、第34回日本サッカー選手権大会（天皇杯）が地元で開催されたからだ。場所は現在の山梨県立大学がある「県営飯田町総合グラウンド」だった。

実はこの大会、山梨のみならず、日本のサッカー界にも一大エポックだった。県協会の誘致活動が実り、天皇杯が初めて東京以外の場所で開催されることにもなったからだ。これは日本サッカー協会が山梨を「サッカーの盛んな地域」であることを、認めた証明でもあった。

ここで少し、山梨県における「サッカー元年」にも触れておかねばなるまい。それからさらに41年遡る大正2年、山梨大学の前身である山梨師範学校に

蹴球部ができ、昭和初期までに甲府中、韮崎中、日川中、甲府商業なども創部する。この頃からサッカー県・山梨の評価は高まりつつあった。

時計を昭和29年に戻そう。決勝はサンフレッチェ広島の前身である東洋工業を、慶應BRBが破って優勝を飾っている。この天皇杯を観戦していたのが、後に甲府クラブを創設することとなる川手良萬（よしかず）。母校の甲府中学（現甲府一高）蹴球部OBらと旧交を復活させた。

翌30（1955）年。愛知以东の東日本ナンバーワンを決める「東日本サッカー大会」で韮崎、日川、甲府工業が1・2・3フィニッシュ。県の体育協会が中心となり「サッカーを山梨の県技に」というムーブメントが生まれてくる。その中心には野口二郎山梨日日新聞社社長、川手の顔もあった。さらに大きな盛り上がりを見せるのが翌31（1956）年。全国都市対抗大会が東京・後楽園球場で開催される。

山梨代表は甲府一高OBで編成した鶴城クラブを主体に日川高OBらを補強した「全甲府」。このチームもまた強かった。堂々のベスト4進出を果たし、3位決定戦は日本テレビで全国放送され、強さをアピールした。

しかし37年ごろ、ショッキングな事件が起きる。鶴城クラブが在日朝鮮人チームと交歓試合を行ったのだが、0-15の完敗。当時県内ナンバーワンの鶴城クラブがこの有様では、と危機感が強まった。中でもこの現実を深刻にとらえていたのがのちの県サッカー協会会長でもある前出の川手と、最後の甲府クラブ会長となる鈴木旻だった。

二人は本格的に選抜チームの編成に動き出した。鈴木は甲府一高OBの岩田利男（山梨大）福島久雄、浅井和夫（ともに明大）中村信雄（立大）のほか、日川、甲府商OBなど県内トップレベルの若手を揃え、ついに甲府クラブの原型が出来上がっていく。

【日本リーグ時代】

1964～1990年

昭和39（1964）年。東京オリニックが開催される。日本はドイツから招いたデッドマール・クラマー氏によって劇的に生まれ変わる。強豪アル

ゼンチンを破る快挙は、世界のサッカー界に衝撃を与えた。

この時の日本代表の守護神は保坂司。甲府一高から明治大、さらに古河電工（現ジェフユナイテッド千葉）のゴールマウスを守っていた。当時の古河は後の日本サッカー界をリードする強豪クラブ。クラマーイズムを注入された保坂の守備は、まさに「最後の砦」と呼ぶにふさわしいものだった。

しかし保坂はソ連との試合で相手FWと接触、地面に倒れ込んだ際、右手首を複雑骨折する悲劇に見舞われる。それでも右手首が固定されたまま動かないハンディを猛練習により克服。代表の正GKの座を譲ることになった



2016VFK
【写真提供 ヴァンフォーレ甲府】

ものの、現役を続行する。

一方、クラマーのサッカーは次のメキシコ五輪で銅メダルという快挙となって結実する。3位決定戦は地元メキシコを破るという、実力を証明する勝ちっぷりだったのは、サッカーファンならご存知の通りだ。

その流れを作ったのも、東京五輪の翌年、昭和40（1965）年に産声を上げた日本サッカーリーグだ。保坂の属する古河をはじめ東洋工業、三菱重工、八幡製鉄、豊田自動織機、日立本社、ヤンマー、名古屋相互銀行の8チーム。時を同じくして、甲府クラブも誕生する。

教員、公務員、会社員、住職、板前、洋服店経営者までいる多彩な顔触れ。甲斐の野武士集団は翌41（1966）年、日本リーグへの登竜門である関東リーグ加入を目指し、予選を戦うこととなる。

川手は甲府中から山梨工専（現山梨大工学部）と進んだあと、建設会社を営んでおり、持てる私財を甲府クラブに注ぎ込んだ。遠征費やユニホームなどの経費のほか、移動にも会社のマイクローバスを提供するサポートぶりだった。

常に行動を共にするイレブンの結束

は強く、関東リーグの予選4試合は全勝で突破。晴れて関東リーグ入りを果たした。

昭和42（1967）年、甲府クラブの監督兼選手の座に就いたのが保坂司。クラマー氏から直接薫陶を受けた保坂の指導のもと「全日本並みのトレーニングを積んだ」ことで、この後続く黄金時代の基礎が築かれた。

第7回リーグまで、8・5・3位と順位を上げていき、この間3度1部リーグへの挑戦権をつかんだが、その壁は厚く跳ね返された。

だが昭和60（1965）年、チャンスが来る。翌年に控えた「かいじ国体」の強化が表れリーグ4位に浮上。入れ替え戦まであと1歩のところまで行っただ。こうした甲府クラブOBが、サッカー指導者として県内に散らばり、山梨のサッカーを支えていった。17回に及ぶ日本リーグの歴史の中で、1部リーグ昇格の悲願はついに達成されることはなかった。しかし「在籍リーグから陥落したらクラブ解散」という十字架を創設時から背負い、アマチュアリズムを貫きながら存続の危機を何度も切り抜けた「赤と白のFC K（甲府クラブ）」の伝統が絶えることはない。その熱きスピリッツはプロ化へと舵を

切った「赤と青のVFK（ヴァンフォーレ甲府）」へと、確実に連なっていた。それはJFLからJリーグの間で降格と昇格を繰り返しながら、戦い続けてきた不屈の精神に現れている。甲府を見守り続けるサポーターなら、誰もが感じていることだろう。



《参考文献》

- ▽「甲府サッカークラブ ヴァンフォーレ甲府 創立50年の歩み」（平成27年 ヴァンフォーレ山梨スポーツクラブ FC K 甲府サッカークラブOB会）
- ▽「情熱！青春譜 サッカー甲府ク25年」
- ▽（山梨日日新聞 平成2年2月27日～3月16日付）
- ▽「甲府クラブからV甲府へ 半世紀の物語」
- ▽（山梨日日新聞 平成27年4月6日～10月6日付）

2016

明治安田生命 J1リーグ

2nd ステージ

節	試合日時	対戦相手	会場	中継情報 備考	試合結果
第1節	7/2(土) 18:00	ヴィッセル神戸	HOME 中銀スタ		
第2節	7/9(土) 19:00	FC東京	AWAY 味スタ	NHK BS1	
第3節	7/13(水) 19:00	ジュビロ磐田	HOME 中銀スタ	浜松エフエム放送	
第4節	7/17(日) 18:00	鹿島アントラーズ	HOME 中銀スタ		
第5節	7/23(土) 18:00	名古屋グランパス	AWAY パロ瑞穂		
第6節	7/30(土) 18:00	浦和レッズ	HOME 中銀スタ		
第7節	8/6(土) 19:00	川崎フロンターレ	AWAY 等々力		
第8節	8/13(土) 18:00	アルビレックス新潟	HOME 中銀スタ		
第9節	8/20(土) 未定	サンフレッチェ広島	AWAY Eスタ		
第10節	8/27(土) 未定	大宮アルディージャ	HOME 中銀スタ		
第11節	9/10(土) 未定	ガンバ大阪	AWAY 吹田S		
第12節	9/17(土) 未定	ベガルタ仙台	HOME 中銀スタ		
第13節	9/25(日) 未定	柏レイソル	AWAY 柏		
第14節	10/1(土) 未定	横浜F・マリノス	HOME 中銀スタ		
第15節	10/22(土) 未定	アビスパ福岡	AWAY レバスタ		
第16節	10/29(土) 未定	湘南ベルマーレ	AWAY BMWス		
第17節	11/3(木・祝) 未定	サガン鳥栖	HOME 中銀スタ		

※(1) AFCチャンピオンズリーグ2016においてサンフレッチェ広島が準々決勝に進出した場合、開催日が8月18日(木)or8月19日(金)に変更となる可能性があります。
 ※(2) AFCチャンピオンズリーグ2016においてガンバ大阪が準々決勝に進出した場合、開催日が9月9日(金)に変更となる可能性があります。
 注) 2ndステージ第9節以降の情報詳細は、7月中旬発表予定。

現役サッカー一部

(2016年5月6日、甲府一高校長室)

保坂 司氏

(昭和30年卒)



▶出席者(写真左から)=サッカー一部顧問・内藤秀俊教諭、谷本浩基君、窪田凌士君、長沼拓実君(主将)、保坂司氏(昭和30年卒)、小林モナさん、久慈有梨愛さん。(司会=小川 朗・昭和53年卒)

「本日はお集りいただきありがとうございます。みなさん、保坂先輩のことは、すっかり勉強してきましたね?」

サッカー部 ハ、ハイ…(一同、ちよつと自信なさそう)。

「まずは先輩から、北海道国体準優勝当時のことをうかがうことにしましょう。保坂先輩、お願いいたします。」

●保坂 当時は12人しかいなかった。「甲府一高と言ったら一回戦ボーイ」なんて新聞に書かれたのが奮起のきっかけでしたね。1年生からサッカーやってたのは3人しかいない寄せ集めチーム。それでみんなで話し合つて「今更戦術なんかやっても身につかない。みんなで攻めて、みんなで守るサッカーをしよう」となった。ボールを取ったら前に3人出る、と。そしていつも横に入り、前に出るようにしろと。

その年は北海道の国体だったために例年より開催日程が早まったのも幸運だった。葺崎のチームがまだ出来上がっていないうちに1対0で勝つて波に乗った。無欲でがむしゃらに戦っているうちに関東大会も勝ち上がつて、国体に行けた。勝ち上がっていくうちに「スゴミも騒ぎ出して「あんな戦術があるのか」と話題になりました。ただ、決勝の相手が刈谷(愛知)で、駆けつけた先輩たちから「刈谷ならこれまで負けたことないから、いけるぞ」と言われてそれまで無欲で来たのに「勝てるんじゃないか?」とタガがゆるんじやった。

それが敗因のひとつでしたね。でも北海道の準優勝の前に広島国体でも3位になってい

ましたから、大学に進んでも「甲府一高悔りがたし」という評判は生きていました。

で、私が(明治)大学4年の時に、ドイツからデトマル・クラマーさんを日本サッカー協会が招いて、今までになかったサッカーが入ってきたわけです。で、クラマーさんが「日本のサッカーは武士道だけだったけど、これからは文化を作らなければ。そのためにはリーグを作るべき」とおっしゃった。で、サッカーにリーグ方式を取り入れたことで野球、バレーなどにも広がったんです。

クラマーさんのもうひとつの言葉に「サッカーは人生の縮図だよ」というのがある。確かにサッカーも人生も瞬間的に変わっていく。それに素早く対応していくことが大事だな、と私も80近くなつてよく分かる。サッカーは人生にも役立つ。

練習は今日の課題をこなしていけばいいというものじゃない。コーチや指導者がパスをしてシュートするという課題を出してきたとする。ボールが再度入ってきたら、トラップするのか、ダイレクトでシュートするのか、ダイビングするのか、瞬間的に判断しなくちゃいけない。ボールが来てからじゃ遅い。習慣的な能力を我々は感性と呼んでいる。その感性を磨くために練習する。トラッピングなんてのは基本。

それをいかに応用するのが感性。(英)プレミア(リーグ)で優勝した岡崎(慎司)リレスター)もそう。無意識のうちに瞬間的に判断してプレーできるから決まる。頭で考えていたら、キーパーやディフェンスに読まれちゃう。ゴール前でその時の状況に応じて、瞬間的にプレー

できるようにしなくちゃいけない。

ああいう感性を磨かなくちゃいけない。練習というのは準備。積み重ねていくと、自分のスタイルが出てくる。3対3でやるにしても、練習のための練習になつちやいけない。私のポジションのキーパーなんて、誰も教えちゃくれない。お手本は一人か二人しかいなかった。ゴールの裏で、ずっと見て学んでいた。準備のない試合、準備のない選手は必要ない。準備ができている選手がいるチームは強い。それでチームの勝ち負けは決まる。

だから練習は大事。辛い練習しないと。120%、「苦しい、限界だ」というところまで極めていって、そういう感性が出てくる。それで試合では、実力の70%を發揮できるかっていうところなんです。だから120%まで積み上げていかなきゃいけない。

君たちはこれから3大会、聞いた通りやってみれば、今からやつて十分間に合うよ。他のチームより気合が入つてるんだから。今日聞いたことをやれば。

大学でキャプテンやつた時に、後輩にいつも言つたのが「私の母校には日新鍾という鐘がある。これは昔から伝わっている。クラーク博士も『ボーイズ・ビー・ジェントルマン』という言葉を残してくれた。日新というのは「日に新た」と書く。今日やったことを土台にして、今日は何をすべきか、と考えて翌日も新たに努力を積み重ねていく。それを私は誇りに思っていると、よく言いました。

その精神は、私の人生、今の社会生活にも生かされている。ともあれ、自信を持ってや。一

高は日新だぞ、と。

●長沼 先ほど当時のサッカーの基盤がFWは攻めるもんだ、DFは守るもんだ、というサッカーから全員サッカーに切り替えた話がありました。新しいことをやるべきのチームの雰囲気というのはどうだったんでしょうか。どう意識を統一させていったんでしょうか。

●保坂 それはもう、皆で決めたことだから。コーチとか、上から言われた話じゃないから。

どうやったらボールを回せるか、どうやったら相手よりシュートを一本でも多く打てるかを考えた。FWは個人技に入るとDFに阻まれる。1つのボールに対し3人はいるようにする。さらにその周りに、4人がいるようにする。これだけなんです。あとキーパーは1対1だともう八方破れ。でも一人DFが来てゴールの半分を消してくれば、こちらは半分に集中できる。そういうフォーメーションをみんな考えていくことが大事。

●長沼 今いろいろな情報があります。

●保坂 それに惑わされすぎちゃダメ。閃いたら瞬間的に行動に移せるか。ワイパーでいいから動けと。立ち止まってしまうようじゃあ困る。ボールを持つたら足を止めるなよ。動くことによって全員攻撃が始まるよと。動かなんで、頭だけで考えてるんじゃないやダメ。キャプテンはみんなに「足は止めるなよ」と常に言わなきゃ。

●窪田 ドイツのコーチが来て、いろいろと教わったというお話がありました。日本のサッカーとの一番の違いは何でしたか？

●保坂 それはね、やっぱり体の使い方が違った。体を入れるとか、ぶつけるとか。そういう動きを、日本選手もようやくできるようになってきた。ブラジルなんかでは道路でやるサッカーで体を使ってる。ボールコントロールは日本選手はもうできているけど。

●窪田 それができるようになるには、試合を意識した練習をすることでリアリティが出てくるということですか？

●保坂 そう。そういう練習をするのが大事。敵より一歩早くボールに寄るとか。

●谷本 なかなか集中力がもたないですが、どうしたらいいのかをお教え願えるとありがたいのですが。

●保坂 人間の集中力が持つのは、2時間がいいところ。だから試合でも練習でも、自分で頭を休めたりするのは大事。相手に意識を変えるとき、集中力のもって行き方も練習で作りに上げてみたら？

●谷本 切り替えてですね。

●保坂 それはチームも一緒。ここという時に、全員が集中できるようにするのが大事。攻守の切り替えが大事っていうでしょ？取られた人間が、すぐにカバーに行くけど、チーム全体が浮立足つ必要はない。相手に持たせても、攻めさせないようにして、チーム全体を立てて直していけばあわてる必要はない。押されてからボール取ったらずぐ攻撃しろ、なんて言ってるカウンター食らったら元も子もない。フィールドにいる人がしっかり考えてプレーできるようにしないと。

●久慈 みんなで話し合って決めたっていう話がありました。一生の友情になりましたか。

●保坂 うん。その友情つちゆうものは深いものがあるよ。

●小林 これからインターハイも控えていて、部活もやっていくんですが、成功するため、結果を残すことって必要なことっていうのはなんですか？

●保坂 結果は後からついてくるもの。つちゆう人がいるけど、まさにその通り。結果を残すために、というより、結果にこだわらないこと。結果がついてくることがある。サッカーで遊んでごらん。そうしたら見えてくるものがある。自分で練習やる前に、リフティングでもなんでも、遊びをやるか。そうすると、どうすれば結果が出るか、見えてくる。結果にこだわりすぎてもダメ。結果を無視してもだめ。いろんな情報が入ってきて、自分を見失うこともある。そういう時は何も考えない。僕が寝る時、もう一人の保坂司がそこにいる。そのもう一人と対話するんです。

普通の人はちよとおかしいとか、そんなことできないとかいうけど、できるんだよ。その相手と対話して、ミスを指摘されると、今日それをやってみよう、ということになる。自分で自分を鍛えた。

最後にクラマーさんが言った言葉。美しいサッカーをしましょう。フェアプレーに徹しましょう。何でもかんでも、相手を蹴っ飛ばしても勝つというのではなく、フェアプレーに徹してほしい。

●内藤先生 甲府クラブでお世話になって、まあ、兄が一高なんです。そこに諸先輩、司先輩であったり、浅井さんであったり、一高出身の皆さんばかりで。鶴城クラブが(甲府クラブの)前身であることを実感しますよね。サッカーを起点に、高校スポーツの原点が、ここ(甲府)一高から始まっている。美しい、フェアな精神っていうものをしっかりと身に付けてこそ大事なものを守っていける。そういうことを改めて感じて、これからの指導に確信というかが差してきた気がします。力強く、生徒と一緒に頑張っていきたいと思えます。

●保坂 試合に負けても「一高の試合は美しいぞ、フェアだぞ。」という評価を得られれば、これは勝ちなんです。試合の勝ち負けは瞬間的なものだけけど、そうした評価はずっと続いていく。ワールドカップやオリンピックに出るのもサッカー、出ないのもサッカー。素晴らしいサッカーができるよ、という自信を持ってやることが大事。1回戦で負けてシュンとしちゃだめ。美しいサッカーができれば胸を張れる。ドイツのデュルスブルグキャンプに行ったとき、州立のサッカーのフィールドが4面も5面もあったり、あらゆるスポーツが集まっている施設を見せられた。それを日本に作るよ、とやったのが長沼健さん、杉山(隆一)、釜本(邦茂)、川淵(三郎)と、皆でプロチームを作ろうと声を上げたのが発端だった。サッカーを通じて友情を育んで、人生を磨いていく、人間を磨いていくということが出来る。サッカーを通じて、大きな財産を得られるということを、後輩につなげていってほしい。